

# 蠅螂の斧

(とうろう の おの)

## 様々なシステムと私

### 第二回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

前回、前々回と書くことが変わった。そしてこういう書き方もあるなあと思った。その時、書きたいものが書けるように、連載の幅を広めに設定しておくのだ。

この範囲で書かねばならないという制約を窮屈に感じるか、制約を設けるからこそ描けるのかは昔、「漫画家」として同人誌発行計画の中で何度も話し合ったテーマだ。締め切りの問題も同様で、作品が出来たときに出すのが自費出版の同人誌のあり方で、締め切りに終わって描くのは作品じゃない、仕事だと言ったメンバーがあった。

もっとも、これはべつに大した話ではなく、そういうことが何にもあるなあという程度の思い出話だ。

四方田犬彦著「アジア全方位」は、たまたま書店で手に取った本だった。氏の本はいくつか読んでいた。様々なジャンルに発信している人なので、全てに興味を持てるわけではないが、日誌風の読み物の中から見て取れるライフスタイルは良い感じだ。中でも旅日記が私には最も好ましく感じられるので、この本も気に入った。長短併せて、旅に関するここ十年ほどに書かれた文章が集められている。そして、こういう書き方もしてみたいなあと思った。

今、目の前にあるものが、私の中で何と繋がり、どんな連想を呼び覚ましているのか。同じ時刻に同じ場所で、同じものを見ていても、人それぞれが受け取っているものの違いはここから生まれる。これはまさしく、個人の内的記憶・無意識と外界に存在するものとの間に構築される個別のネットワーク世界だ。

必ずこれとこれが繋がるなんて保証はない。そこに合理的根拠を求めすぎると世界がつまらない。びっくりする楽しみは、生きている楽しみだ。「そうか、そうだったのか……」と感嘆の声を上げる権利は失いたくない。そして出来ることなら、誰かにそう言わせたい

私が世界のあちこちの場所が好きなのは、日常とかけ離れた場所に自分が身を置くと、日常とは少し異なった自分が作動し始めるような気がするからだ。旅好きなのに世界遺産を巡ったり、駆け足名所ツアーにあまり参加しない理由はこれだ。逆に、近くまで出かけておいて、そこには行かないなんてことは意識的にも、余り意識せず結果的にであってもする。

だからといって日常が離れたくて仕方ないものかという全くそんなことはない。日常をどう充実させるかは、海外旅行やイベントよりもずっと楽しい。日常を平板にしないために、いろんなアイデアを求めて外の世界を旅しているのかもしれない。だから、そんなところは日本人観光客は行かないと言われても、足を伸ばすこともあるのだが決して冒険家ではない。その結果、一見、手間と暇がかかって収穫は少ないように見える。しかしその体験は私の中では面白く積み重なる。

留学をしたことがないので、日本以外の場所で長期間の生活経験がない。もう一度、生きることがあれば、今度は留学というか、遊学してみるのも良いなあとは思っている。しかし、実感的には私の今の暮らし方は、かなり遊学的である。この連載が لندن、そんな匂いのものになってゆくと良いと思っている。

(2013/11/25)

## なんで、イスタンブール？

【日誌】2001/08/25（12年前）

国内線が多いが関西空港の利用頻度も増えて、だんだん慣れてきた。

7月1日から日本の出入国カード記入が不要になったので手間が省けた。今から乗るのは、イスタンブール直行便（トルコ航空・JALの共同運行）。どんなルートを飛んでゆくのかと思っていたら、機内誌掲載の飛行ルートでわかった。

「関西空港」－「北京上空」－「ウズベキスタン・タシケント北部上空」－「アラル海上空」－「カスピ海上空」－「アゼルバイジャン・バクー油田上空」そして「黒海沿岸トルコ上空」－「イスタンブール」到着。

飛んだことのないルートだった。昔、ヨーロッパ線は南回り、北回りと言った。北回りはアラスカ・アンカレッジで給油してヨーロッパに入った。地球頭越しである。とにかくヨーロッパに着きたい一心で機中を我慢する。アンカレッジは夜行バスのトイレ休憩のイメージだった。

そして選択肢の一つとして初めて南回りのシンガポール航空機を選んだのは、35年以上も前のことだ。四方田は著書の中で、「ヨーロッパに行くのに、北回りを選んでいような人に作家の資格はない」と開高健が書いていると書いていた。確かに、あちらは何も起きないルートなのだ。シンガポール、コロombo、テヘラン、ドバイ、パリ、アムステルダムと、各駅停車状態の長時間飛行。シンガポールーコロombo間だけで乗降する客など、バス乗り場状態。立席の人はいないからかろうじて飛行機なんだけど。当時はまだソ連や中国の上空など飛べなかった時代だから起きた選択だった。

それが「関西空港」－「北京上空」－「ウズベキスタン・タシケント北部上空」－「アラル海上空」－「カスピ海上空」－「アゼルバイジャン・バクー油田上空」そして「黒海沿岸トルコ上空」－「イスタンブール」着である。丸ごと中国、旧ソ連上空である。なんだかワクワクしてしまう。

北京は然るべき時期が来たらと思っているうち、だんだん訪れにくくなった。PM2.5は相当に酷

そうだし、日中関係も、まともな市民レベルには影響はないと思うものの、気はそがれる。

CHINAエリアは香港もマカオも上海も杭州も成都も、九寨溝・黄龍なんて僻地にも、台北にも出かけたが、北京は残ってしまった。

ウズベキスタンはソ連時代、ウズベク共和国と言って首都はタシケント。周辺にシルクロードの街々、サマルカンド、ブハラ等がある。

40年前、初めての海外旅行がここだった。ソビエト連邦は共産主義の国。出入国にも持ち物やカメラ撮影場所などには、気をつけて日ソツーリストビューローのツアーに参加していた。そんな私には、サマルカンドの道ばたで平日昼間からチャイや水タバコを吹かすおじさん達の群れは違和感があった。

「真っ昼間から何してんだ。働かないのか！」と思ったのだ。その頃からウズベキスタンはロシアとは別の国だったのだ。

更に国営航空会社アエロフロートの勝手な事情で、前日、モスクワ経由という考えられない迂回をさせられた旅行者にとって、首都の人々とウズベクの人々の、何もかも違う有り様は、とうてい一つの国とは思えなかった。そしてその後、ソヴィエト連邦は沢山の国に分かれていった。

アラル海と聞くと思い出すドキュメンタリー映像がある。砂漠の中に取り残された船である。かつてそこはアラル海の港だった。ちいさな湖ではない。とても大きな内陸部の塩湖である。これがソ連の計画経済政策による水資源利用によって、流入する川の水量が大幅に低下して、湖は大規模縮小をきたし、元のアラル海は見る影もない大環境破壊事態を作り出した。



大アラル海と呼ばれていたところは2010年代には完全に姿を消して砂漠になるだろうと言われている。

想像力を働かせてみよう。その湖岸で生計を営む家族にとって、縮小する湖は文字通り自然破壊と生活破壊である。にもかかわらず、ジワジワ進行する被害にはおそらく保障など用意されなかったのではないか。

小アラル海の復旧計画もあるらしいが、今ではそれぞれ別の国になった沿岸諸国の様々な利害関係もあって、文字通り覆水盆にかえらずを見せている場所である。

その先のカスピ海沿岸、アゼルバイジャン、バクー油田は、意味なくいつか行ってみたい場所の一つである。しかし1991年のソ連崩壊後の独立に伴って抱えた国内紛争は治まっていないらしい。

こんな上空を飛び越えてトルコ領内に入った飛行機はイスタンブールに到着する。



十二時間余りでイスタンブール・アタチュルク空港に到着。見知らぬ国の空港に着くといつも、ちょっと不安がよぎる。理解できない世界がここを出ると広がっている。

私は全く知らなかったのだがこの時、後日判明した驚くような事実が発生していた。

というのも、この同じ便に、青森県弘前で継続開催しているワークショップの参加メンバーが、新婚旅行で乗っていたというのだ。

彼女は直ぐに私に気が付いたそうだが、女性がご一緒だったので、声を掛けませんでしたという。「奥さんだっちゅーのに！」

しかし、この対応は「エチケット」という英国紳士のたしなみに照らすと、正しい対応であるらしい。こういうシチュエーションでの対応が「エチケット」では定められている。

曰く、先方が気づいて、こちらに挨拶があったとき、初めて気づいたように挨拶を返す。これが「エチケット」だそうだ。ああ、面倒くさい。

とりあえずガイドブックは有り難い。手荷物を取る前に書かれているように、空港内で素早くトルコリラに両替。100ドルが14400000TLになる。訳が分からない。一億四千四百万トルコリラ。

あちこち旅をしてきたが、こんなにゼロの数の増えた両替は初めてだった。そして後にもない。経済に疎いのでよくは分かっていないが、何だか気の毒感の伴う両替だった。

日本の旅行社HISで三泊だけ予約済みのホテル（後の4泊は、現地で街をうろろしながら探そうと考えていた。）がどんな場所にあるのか。アクサライという地名を頼りに、空港ビルを出たところが乗り場の空港バスに乗車。

タクシーで行ってもいいのだが、最初にそれやると、何でもタクシーになってしまう気がして。それに、いきなり運賃をぼられたりすると、あとあと印象の悪い後遺症が残る。

空港は空いていて、出国手続きも簡単に出国にも書類はなし。パスポートチェックだけで、手荷物検査もなしである。

夕方から夜になりかけた街を疾走するバスでアクサライにむかう。といっても、アクサライ行きではないので、乗るときに何度か「アクサライ？アクサライ？」と連呼しておいた。

すると近づいたときには、乗務員や客が「ここだここだ！」とみんな教えてくれる。こんな事一つで、良い国だなあと思ったりする。アクサライは地元の乗客もたくさん下車する旧市街中心の一つだった。このバスはこの先、新市街タクシム広場まで行く。

アクサライは雑然とした街、ガイドブックの地図上にイメージしていたのとは大きく違った。ホテル

の客引きに声をかけられ、逆に予約したホテルを尋ねるとすぐ教えてくれた。

このホテルに決まったのは偶然にすぎないが、この時間に、ここから路面電車で観光の中心スルタンアフメット近くのホテルを目指す人は、ちょっと心細かったらう。

典子は早くも、「機内で眠れなかった、バスに酔ったみたいだ」と不調を訴える。チェックインしても何も食べたくないというので、私一人でホテルのまわりを探検散策に出る。

21時過ぎ。裏通りの八百屋でぶどう、モモ、りんごを買うことにしたが、ゼロが無茶苦茶ついている金の単位がわかりにくい。適当に出したら、何十円の買い物を千円札でしたような具合で釣り銭がまた一杯。

表通りの店ではビン入りのりんごジュース、そしてレストランのテイクアウトでドネル・ケバブ（あぶった薄切り肉のバゲットサンド）を買ったら更に残金が増えているような気がした。ホテルに帰ると、典子もそこそこ食べた。

## 個人別 出版事情

【日誌】2013/10/30（今です）

多忙なポンコツ気分を立て直してくれる良いことがあった。「家族理解入門—家族の構造理論を活かす—」中央法規出版2013、7月発売が二刷になったと編集者から知らせがあった。とても嬉しい。読んでくださった人たちに認められた気がする。昨日も読書会のテキストとして良いと褒めてもらったところだった。

本を出すと売れ行きは気になる。印税が気になるのではなく、出したものが世の中にどう受け入れられるかが気になるのだ。

増刷は一つの承認の表れだ。多く売れる本が良い本だと思っているわけではない。同時に、良いものはなかなか一般人には分からないから、認められないなんて傲慢な気持ちもない。

出来れば多くの方達に認められて、長く愛して貰いたいと思う。その現れの一つがロングセラー、増刷だと思う。

以前、文春新書で二冊出して貰った。一つ目は「不登校の解法」、これはとても良く受け入れられたのだろう5刷になって、今も書店の棚にある。

ミネルヴァ書房刊 季刊「発達」の連載をまとめたものだった。気をよくして、二冊目を考え、継続していた連載のその後の分を一冊にして出した。



内容は前作とほとんど変わっていない。連載中のものの続編だった。タイトルは「家族力×相談力」にした。「\*\*力」が流行していたのを少々意識していた。

これが見事にこけた。増刷はかからず、早々に出版社から絶版にするので、残部廃棄になるが、希望があれば差し上げると言われた。そして新書300冊余りを無料で貰った。

きっと「不登校の解法 2」にすれば良かったのだろう。そうすれば読んで貰えた人はもっとあったに違いない。新書の\*\*カブームに惑わされてしまった。

だから「家族理解入門」の二刷りが嬉しかった。そんな話をしていたら、「家族の練習問題 第一巻」がそろそろ3刷になると聞いた。そして「第二巻」も二刷だとか。

本を作るのはとても多くの人たちの手を煩わせる。そしてやっと出来上がっても、思いのほか伝搬力は小さい。文春新書の初刷は1万2000部だったと思う。これはとても大きな数だ。2, 3000部の増刷をかけて6刷なら、二万部を超えている事になる。

専門書の単行本は、多いものでも3000部から

なんて世界だ。1000部スタートのものだって沢山ある。出版界はなかなか厳しい。

そう言えば、川崎二三彦君は岩波新書「児童虐待」が10刷になったとツイッターに書いていた。

それでも、みんなが軽く口にするような印税生活なんて、とてもではない。今となっては、夢の印税生活という夢そのものが絶滅危惧種扱いにならざるを得ないだろう。

そして私は、このような、原稿料も印税も無関係なWebマガジンの編集長をしている。

読みたいと思ったときに、バックナンバーを素早く手にしてもらえることが誇りだ。支払いも手間も求めない。何かの会員であることも要求しない。「関心がある」、このモチベーションだけがドアを開く鍵になる。

## 音響担当

【日誌】2013/10/30

米原市で講演とQ&A対談。彦根児相長のS野君と。参加者も様子のわかった人達で話の流れも順調なはずだったのだが・・・。

マイク不具合頻発にチョイイラ。ハプニングで自分のモチベーションが揺れるのが鬱陶しい。出来るだけ冷静なコントロールをと思いつつ、準備した中味がグチャグチャになるのが許せなくて(^\_-)・・・。

講演会場のマイク調整が出来ていなかった。そのために、話の腰が何度も折られた。聞いている人たちには、講演の中で起きている私の側に属する不備だから、心優しく待っていてはくれる。しかし私にすれば、この状況はまったく理不尽な災難である。

こんな事は今年初めに、大津プリンスホテルの大宴会場で800人近い人の集まった講演でも起きた。演者はどうしようもなく、修復を待つしかないのだが考えてみて欲しい。

舞台のクライマックス直前に音声が中断し、しばらくお待ち下さいとスタッフが入ってきて、修理後、引き続き盛り上がってください！はないだろう。

こういうハプニングまで、演者の対応力にゆだねられるのは我慢ならない。演者は、その会場に来てくれた人に、満足して帰って貰う責任を負っている。

そのために、この催しに適切な内容を直前まで準備してここにやって来ている。

会場準備をする側は、私の接待をするよりも、場内の音、光、使用機器のコンディション調整が優先作業である。無論、会場の世話役がプロではない場合も多い。だからこそだが、慎重でなければならない。

近年ますます、主催者は事前に何度も、打ち合わせをしたがる。様々な問い合わせもしてくる。メール時代になって簡単に送受信ができるようになったせいで、安易な問い合わせや確認も多い。

依頼文書を郵送していた時代なら、連日のそんな通信はおかしいと思われるだろうから、自粛するのにはである。

そして当日、会場にやってきたら後はよろしくというつもりなのだろうが緩くなる。その結果、何度も何度も、マイクロフォンの不調でドタバタを演じなければならないことになった。

客席からはコミカルに見えるかも知れないが、それを見せに来ているのではないので、内心イライラする。それが講演の展開に影響する。前夜、最後の詰めをした周到さは消されてしまい、同じ所を何度も繰り返し話したりすることになる。

こういう準備はプロではないから仕方ないではなく、プロではないからこそ慎重でなければならない。臨床ってそういうことを言うのだと思う。本番で、緊張して失敗してしまいましたというのは仕事としては通用しない。近年、こういう事の重要性をひしひしと感ずるので、準備の出来るところ、慣れたところにしか出かせないようにしはじめている。

負担が大きく、結果の手に入らないミスに、自分が巻き込まれるのは、ほどほどにしておかないと、自分が消耗してしまう。

## 編集長作業ミス

【日誌】2013/10/29

学会誌ニュースレター用に戴いた原稿の掲載漏れという事態を起こしてしまった。

メールアドレスを2つ持って連動させてiPhoneとデスクトップの併用をしていると、何かの拍子に

確認が甘くなる。せつかく書いて頂いたのに申し訳ない。仕事が多すぎるとこういう所でミスが出る。



#### 中益さんの思い出

平木 典子

中益さんのお慶びを受けてみました。お喜の方、「よく学生さんが来られますよ」とおっしゃって、案内していただきました。9月28日、亡くなってもう1年が過ぎました。

この1年、直接指導を受けていた学生さんたちは言うまでもなく、「中益さんがいたら」と思いながら過ごした人々は多かったのではないのでしょうか。その存在の重さは、いらっしやらなくなったからの方がいっそう感じられ、残念さもつります。

9月の下旬は、中益さんにとって気持ちが急がせられる時期だったことを思い出します。IPIの帰国道は報告の音が落ち始め、それを見ながら、毎年のように「もう秋がきちゃった」とつぶやいていました。

昨年の今ごろ、中益さんはどんな思いでこの時期を過ごしていたのだろう。「もう秋が来ちゃった」という言葉もきけないままの別れになってしまいました。

一方、日頃の中益さんはそんなことをつぶやくとは思えないほど、多くの仕事を着々と成し遂げて私たちに発信してくださりました。冷静な人柄は、誰にも公平であることでやさしさと厳しさにも包まれていました。その見識と専門性は日本にとってもかけがえのない力となったに違いないことを思うこともしばしばです。

私たち身近な者にとってほほえましい思い出は、中益さんはときどき下ジをしてくれることでした。二人で箱根のホテルの会合に夕方遅く、遅刻して出席しようとしていた時のこと。駅からタクシーに乗って、中益さんが乗ることなく「〇〇ホテルに行ってください」と告げましたが、ホテルに着いてみると、そこは会場ではありませんでした。私たちはしばしその場に立ち尽くし、おもむろに案内状を見直して、再びタクシーに乗ったのでした。私はホテルの名をうろ覚えで、あまりにも袋々で行き先を告げた中益さん任せで、車中でも別の紙に花を乗せていたのです。仲間内では、そんな出来事もよく話しては、笑い合ったこともありました。

そんな中益さんを私たちはとても大切に思っていました。

前項、音響問題では文句をたれたが、だからといって私が、用意周到で失敗はしない男であるなんて言いたいわけではない。

家族心理学会のNL編集をしている。毎回原稿を募って、再度お願いし、それをレイアウトして24~32頁の冊子に仕上げている。

この作業中のあつてはならないミスの話である。十年近く編集をしてきて初めてのことだった。戴いていた原稿を掲載から落としてしまったのだ。

要因はいろいろあり、振り返ってみるとそこが落とし穴なのは理解できた。執筆にはお詫びして、次号での登場をお願いしたが、原稿そのものは今のものなので使えない事になった。

なかなか原稿をいただけず、ページ割りが確定しない中での出来事だから、自分的にも残念で仕方がない。あの原稿があったら、4の倍数の28頁立てに完成させられたのだ。

私は今、この対人援助学マガジン約200頁を年間4冊と上記の家族心理学会ニュースレター約30頁

を年二回、合計6冊の発行物の編集長をしている。二ヶ月に一度、発行日が来る計算だ。

当然、編集長として精読して校正して等と考えていたら、自分の時間はなくなってしまふ。だから、マガジンの方は信頼できる実績の人の原稿はフリーパス。必要なレイアウトをするだけである。それも自分でしたい人にはレイアウトもお願いして、PDFで届けて貰う。そうすれば作業はページナンバーを確定することだけになる。

マガジンの方は全記事連載だから、「締め切り日の告知」だけしておけば、後は個々人の自覚のみ。ほぼ皆さん届けてくれる。

一方、30頁ほどだが「家族心理学会ニュースレター」はそれと比べると手間が要る。執筆依頼が必要だからである。しかも、みんなが書きたいというわけではない。打診して断られ、予定変更で無理だと告げられ、続けて書いてくれる人頼みにしていると、執筆者が偏って固定化することになる。

私は原稿集めに苦勞していない方だとは思いますが、それでもなかなか大変だ。そんな中でやっているのだから・・・と言いたい気持ちもありそうだが、それは言いたくない。基本的にやりたいからやっているのだから、やる限りは周到に完成させた。

失敗は取り戻せない。繰り返されないように自戒するほかない。次々に担当者が変わり、前にもあった失敗が繰り返される世の中は、その当事者だけの責任ではない。社会構造上の弱点、欠点である。

それを個人の力量如何のように語るのには、システムの発想を知らないと言うことである。

## スケジュール管理

【日誌】2013/10/27

金、土、日の出張を繰り返していると1週間が恐ろしく短い。月、火、大学院での仕事をして、水曜に地域でのあれこれ仕事、木曜午前の相談室対応をしていると、本当にあつという間の週末だ。

漫画の新作ペン入れは月末の水曜の夜から夜中に泊まり込みでということになる。これが好きなのだから仕方がないが、困ったものだ。

九月、十月、十一月、十二月の第一週末は、2011年秋以来、10年間、ずっと東北巡業にスケジュールされている。

被災地復興のためにマンガ展など何になるのかとか、いつまで続けるのかといった議論を排除してしまうために、長期プランを最初に確定してしました。同僚のMさん、Nさんと三者合意の10年間ある。

すると急に、秋が窮屈になった。秋には札幌、前、東京、埼玉、金沢、松江、広島、の週末WSプログラムが例年計画されている。そのほかに学会、演や一日WSを、名古屋、山口、京都、大阪等で行っていて、ここに大学院の授業とゼミが入る。木日の定例相談室仕事もあって、めまぐるしい。ここに月刊連載二本と季刊などの連載三本が入る。

だからマネージメント出来ないといんでもないことになる。そうならない為には、自分で着々と付けていくしかないのである。

列記すると大変そうだが、順番に片付けると確実に減っていく。そのうち新しいものが追加されるのだが、スケジュールを見てため息をついても、何も起きない。

## 台風と飛行機

【日誌】2013/10/25

遠くでヤキモキしていても意味がないので、伊丹空港で様子を見ようと、大幅に早目に空港バスに乗った。その車中のスマホ情報で、前の便が出発してから、機体整備のための引き返したことを知る。台風の話は書かれていない。よく分からん情報だ。15時50分の便は飛ぶのか？飛ばないのか？を今からカウンターで確かめる。

空港内アナウンスに、「目的地の天候不良のため、引き返す事があります。ご承知おき下さい・・・」というのが増えてきた。青森行きもそう言っている。そして伊丹の天候も、悪くなってきている。

もし青森が天候不良で大阪に引き返したら、伊丹は今より天気は更に悪いだろう。台風はいよいよ接近してきている。

しかし空港ロビーの全フライト表示を見ると、ほとんど欠航便はない。台風は風より雨や高波の警戒が主なようだ。

しばらく空港内で食事をし、お茶を飲みながら原稿を書く。その間に状況が激変したりしないことを祈る。前便は機体整備不良で引き返したのだった。

【日誌】2013/10/26

昨日は一日、無事青森につけることを願って待機をしたり、早目に対応したりばかり。その間に、なんとなく読みそびれていたこの本を手にした。その結果、400ページ読了。面白い、これも半沢直樹じゃないか。やられたらやり返す。



久しぶりにエンタメ系の次々手を出させる作家と遭遇した。どれも同じじゃないかという自分の中の声を無視して、同型の繰り返し娯楽を楽しむ。TVドラマ放映後直ぐ、「ロスジェネの逆襲」を読み、その後、「空とぶタイヤ」「果つる底なき」とまだ飽きていない。

## 飛んで、イスタンブール

【日誌】2001/08/27(12年前)

映画007の映画「ロシアより愛をこめて」だったかで印象に残っている地下宮殿貯水池に行く。ここは是非来てみたかったところ。こんな広大なモノが都市の地下に昔に作られていた事実に驚く。

そこのカフェテラスでお茶。地下にあるので涼しい。でも、プールのカフェみたいな感じでもあり、ツアー観光客はとっとと通り過ぎてゆくから、店でゆっくりする人などいない。ここで1時間ばかりくつろぐ。

時代を問わず、人々が集う街が形成されると、そこには自ずと必然となる機能が生じる。

道路や水道、下水処理、やがて電気、ガスということになるのだが、その片鱗を目にすると、人間の知恵に感動を覚える。特に生命には不可欠の水がどのようにもたらされたのかの物語は面白い。

東京江戸博物館の展示とビジュアルデータのところで、江戸の町の水利（玉川上水）を見たことがあるが、大したものだと感嘆した記憶がある。

世界のあちこちに水道橋や通潤橋がある。長い運河を整備した場所も沢山ある。そんなものを感じながら見ているのが好きだ。。



今泊まっているロイヤルホテルは何の特徴もないツーリストホテルだが、悪くもないので連泊を打診する。しかし、週末は団体が入っているのか、明日一泊だけ延泊可能になった。しかも、日本で予約した値段より十ドル高い、六十ドルである。

そこで明後日からの宿の確保に街に出る。ガイドブックのトップに登場するフォーシーズンホテル。

（世界展開する有名な高級ホテルだ）イスタンブールのは昔は監獄だった建物をリノベーションしたとある。ぜひ泊まりたいと思ったので、訪れてフロントで尋ねたら空いていた。一泊320ドルの高級

ホテルを旅の最終日二泊することに。

その後、地下貯水池近くのプチホテルに部屋を見にいった。こじんまりした綺麗なところだったので一泊70ドルで2泊予約。近所にはランプで有名なプチホテルもあった。

街のホテルはどこも、けっこう空いている。観光シーズンといってもこのくらいなのだ。日本のあれこれの予約状況を考えると不思議。

まず大前提に日本の人口密度の問題があるとは思いう。しかし予約の問題は国によって随分状況が違う。

ヨーロッパで移動手段に列車を使った経験はかなりある。駅で特急列車の座席を求めて列にいたことも少なくない。イタリアでは自動販売機で座席指定の購入もした。連番の座席を買ったのに、乗ってみたら変な並びの席だったのはご愛敬だ。シートのナンバリングがいまだに謎だ。それに走り出してしまえば、空いている席には指定客でなくても座って構わないのは合理的だ。

でもとにかく、当日でチケットはある。基本はこれだ。ホテルだってツーリストインフォメーションであたれば、希望のグレードのホテルを大抵紹介してくれた。

ところが日本で移動するのに、当日チケットやホテル探しをしたら、えらくストレスフルだった。その日の気分で行き先を変更などしたら、宿や列車のチケット確保に大変なことになる。だから旅の自由さが確保できない。